

# 松本瑜伽子 (チャチャ)

Yukako Matsumoto

古典藝術家

## 「芸は身を助く」を体現 人生の後半は芸の真髄を生かす



【東京都発】一流の師に数々の芸事を学んだチャチャだが、高校3年生のときに日舞の道も音大への進学も閉ざされた。20歳になった頃、雅楽の世界を知り、修練を重ねて芸の真髄と精神性を学んだ。30歳の時、家庭の事情で家を追い出されてからは、ピアノのスキルを生かし、子供たち向けの教師を務めて生計を立ててきた。そして60歳、満を持して中国へ。雅楽のルーツを知りたい、古典藝術の伝道師になりたいと考えていたからだ。中国から伝わって日本で醸成されてきた古典藝術を、商品ブランディングや演出の仕事を通じて伝えたいと、ますます意気軒高である。

(本紙主幹・奥田喜久男)

### すべてを失っても 教養は財産となる

奥田 雅楽は、チャチャにとって特別な深いものになりましたね。

チャチャ そうですね。雅楽は職業ではなかったのですが、他のどの芸事や趣味をはるかに突き抜けて次元の違うものでした。芸術と真理の追究と言ってもいいくらいでした。

奥田 ただただ惹かれたのです。一生の学びで手放せないものとなった。ところで、やんごとなき話

が続くけれど、芸事で生活するのは大変でしょう？

チャチャ 私が30歳のとき、両親はそれぞれ別の相手を見つけて、父は出て行き、私は継母に追い出されることに。すぐに稼げるものとしてピアノ教師を選び、生計を立てたのです。

奥田 継母の呪縛からは解放されたのです。

チャチャ はい。軌道に乗るまでは大変でしたが、習いに来る子どもたちは長年辞めず、総勢100人くらいに教えるようになりました。

奥田 チャチャは一流の師たちから芸術のすばらしさを教わってきたから、生徒たちにもそれを継承していこうと思ったのでしょうか。

チャチャ ピアノを教えるとき、いつも子どもたちに話していました。人生はいろいろなことがあります。でも、ピアノは一生の友達になってくれるのよ。だから、「本当の気持ち、つらいこと、嬉しいことをみんなピアノに語っていいの」と。ピアノをメインとして、およそ40年は芸事関連で働きました。そうするうちに、芸事の真理も見えてくるようになりました。

奥田 どんな真理が見えてきたのですか？

チャチャ これまで習ってきた師たちの芸の根本は皆同じだったということです。どの芸をとっても、その形に絶対必要になってくるのが「やさしさとか、おもしろいとか、親切とか、愛すること」でした。行きつくところはすべてそこではないかと。ずっと、私は親から愛されていない、この世に愛など無いと思っていましたから。

奥田 でも、芸術は違うかもしれない、と。

チャチャ そうです。「愛されることを求めるのではなく、(芸を)愛していくことがよりどころになる」と。これは大きな発見になりました。

### 満を持して 60歳で中国へ

奥田 60歳で中国に行かれたのは、雅楽のルーツを探りたいと思っていたからだとか。で、現在、古典藝術の伝道師として活躍されていますね。

チャチャ 実は、もうひとつ中国へ行った大きな理由があります。私が4歳のとき、父は継母と結婚しましたが、継母には満州に残した婚約者がいたのです。その方が、父が不在のときにわが家へやって来たのです。

奥田 お父様も継母様も多情多恨の人ですね。

チャチャ この方は日本人で職業軍人の中佐。とても素敵な方でした。来ると中国の話をとくさんしていられるのです。「中国には四合院という四方形の中庭を囲んだ伝統的家屋建築があって、隣にはあがりかまちがあってそこで麻雀をするんだよ、疲れると寝られる椅子があってね」などと。

奥田 チャチャは子どもながらに想像するんですね、そんな暮らしぶりを……。

チャチャ ところが、話はあるところから戦いの場面になったりします。「荒野で次の駐屯地まで行く途中、空が一転、真っ暗になって、運転手がホロの下に隠れる一と叫ぶ。何かかと思いきや、バツ





**PROFILE** 1944年神奈川県生まれ。数多くの文化人や芸術家が集う家で幼少期を過ごす。それにより日本舞踊、ピアノ、声楽、絵画、書道、茶道、箏曲など一流の師に学ぶ。中でも日本舞踊は横浜共立学園時代に名取、最年少で師範を取り、水木流家元の継承を約束される。茶道の裏千家は教授を取得。雅楽は東儀博氏に特別待遇にて習得。日本雅楽協会に所属し文化庁行事にて演奏。ピアノ教師は40年の実績がある。現在は古典藝術伝道師として日本と中国で活躍中。

構成／高谷治美  
text by Harumi Takaya

撮影／松嶋優子  
photo by Yuko Matsushima

2020.3.27 / 東京都千代田区のカフェ・アマルフィーにて

が大量に空から降ってくるんだ」とリアルに情景描写をされる。

奥田 そうか、継母の横で将校の話聞いていたのですね。まるでパール・バックの『大地』のような話。

**チャチャ** 将校は「私は職業軍人なので、日本のためなら皆殺しができるのだけど、老人やおんな子どもは逃がしてあげたい。だから、逃げろーと叫ぶ。せめて何人かが助かってくれればいい」と話しながら、胸が痛いとおいおい泣きました。そのとき私は、中国の人たちに負い目を感じました。

奥田 贖罪ですね。

**チャチャ** 私の心の中に、お詫びをしなければならぬという感情が湧いてきたのです。

奥田 その将校が中国への種を植え付けたんですね。それで60歳になったら行こう、と。そういえば、『千人回峰』で芸術家の王超鷹さん取材させていただきましたが、彼も中国の歴史に翻弄された方でした。チャチャは彼が日本に留学した際に面倒をみたらしいですね？

**チャチャ** 困っている中国人をただただ手伝いたい。王さん以外にも、17年間で10人くらいの中国の留学生の面倒をみてきました。

奥田 30歳で無一文で家を出て貧乏なのに、どうして中国の留学生の手助けをしようと思ったのか。その理由がわかりました。

**チャチャ** 自分を支えていく技術は身につけていたから。

奥田 知識の泉も自分が飲める位置にあるし、飲める器量もある。素晴らしい。

**チャチャ** 中国文化には興味がありました。特に唐時代。日本の正倉院の中を見るにつけ、唐時代のものが取り入れられ、生かされてきたこと。それらをもたしてくれた先人がいたのだから頭が下がります。残された素晴らしい文化芸術を伝えていきたいですね。

奥田 チャチャはやはり古典芸術家だ。

## 上海で出会った 3人の巨人

奥田 中国ではチャチャらしい生き方を見つけられましたね。

**チャチャ** はい。さまざまな経験をして何が大切かわかりました。そういえば、そんなターニングポイントを体験しました。

奥田 どんな体験ですか？

**チャチャ** 64歳のとき、上海の街を歩いていたら、ビル30階建てくらいの巨人3人が目の前に現れたのです。もう他界された東儀先生と高校のときの高橋ゆき先生、そしてもう一人は坪松敏子さんといっています。

### こぼれ話

「牛乳ビンに野花を入れて...」とおっしゃる。そう言われると、小津安二郎作品のシーンがおぼろげに浮かぶ。呑気な気分していると、小さい頃は「虐待」されていたという。ドッキリしていると、「30才で独立。64才で悟る」と。聞く側が驚くような人生をスラスラと、整理箱の中から人ごとの出来事のように、おっしゃる。なるほど、あの父にしてこの子ありかと腑に落ちる。

いつの頃からか、チャチャは自分をもうひとりの自分で見つめることをしておられる。これが悟りだったのか、いやそうでなく、追い詰められ続ける自分からの逃避だったのか。話題は精神世界の中に入っていった。その瞬間から、目力がさらに倍増した。あたかも自分という楽器を扱うが如く。強弱、細く太く、早く遅く、音色を変えながら話は続く。

そうだったのか。「ひちりき」だ。筆箒がチャチャの転機だったの。お会いする時に、大切にしておられる筆箒をお持ち願った。両手にすっぽり収まる雅楽器だ。

たて笛のように蘆舌(ろぜつ)を口にくわそて息を吹き込むと鳴る。越天楽を思い出して欲しい。主旋律を奏でる楽器だ。この音が鳴ると、突然に雅楽の世界に覆われる。チャチャはいう。「この蘆舌は先生がおつくりになったのよ」。この物言いを人は減多にしない。だって生きてる中で1人か2人しかいない大切な人のことを語る時のそれだからだ。吹いて聴かせて下さいと頼んだ。すると「わたし、吹けないのよ」と。最初は戸惑ったが、軽はずみなお願いであることに気づいた。



奥田 またすごい体験をなさいますね。

**チャチャ** 彼らはニコニコ笑って言葉もなにもありませんでした。やさしく微笑んで慈愛の眼差しがあっただけ。この瞬間に「神様はいます。見えない世界を信じます」と。これまで「生きるって？ 親子ってなに？ 愛ってなに？」と思いつけていましたが答えが出たようでした。

奥田 チャチャが通っておられた女学校はクリスチャンの学校でしたね。その時はまったくわからなかった？

**チャチャ** わかりませんでした。神様なんていないと思っていましたし、牧師さんに喋れば許される世界だと思っていました。高橋ゆき先生は女学校のと、継母とのつらい体験について何も聞かずにそっとしてくれていました。そして私が留年しないように学校と関わってくれた先生です。

奥田 この先生もご苦労なさったんでしょうね。東儀先生と高橋先生と、もうお一人方は？

**チャチャ** 坪松敏子さんといって父の親友の奥様です。観音様のような人でした。私が30歳で文無しだったときにお金を工面してくださり、部屋を借りることができました。

奥田 3人の方々はチャチャの守護霊ですね。

**チャチャ** 人はやさしい愛の体験があれば、それを支えにして生きていけるし、何かを愛していくことがよりどころになる。だから私も与えようと。

奥田 64歳でチャチャはクリスチャンなられた。

**チャチャ** 芸事をするときにも感じていました。どんな芸の形でも愛していなかったらうまくいかない。

奥田 芸事の根本が仕事の根本にも通じますか？

**チャチャ** 通じます。学んできた芸事すべてが生きられます。愛をもって仕事をします。芸事の形を作るように、自分の感性で博物館を演出したり、古い街にある書院を演出していったりするので。その

ためには、博物館や書院の内容を真に理解した上で、理念や考え方を先方に聞きながら一緒につくり上げていきます。文化事業でも、商品プロデュースでも同じです。

奥田 そんなふうに後半の人生で芸事の究極が生かされたわけですね。

**チャチャ** 本当にそうです。そして、人が喜んでいられるのを見ることは自分の幸せですね。役に立てる人間になりたい。そのために芸事を極めて行った。自分が持てる技術をしっかり持ってないといけないということです。

奥田 たくさんのいい芸術を知り、自分のものにしてきたから、応用が効くんですね。中国の人からチャチャの演出仕事は大変気に入られているのでしょう。これからも頑張ってください。

BCNは「ものづくりの環」を支え  
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます  
ものを売る人がいます  
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます  
その意(おもい)が新しいものを生み出す

使う人、売る人、つくる人——  
私たちは「ものづくりの環」のなかで  
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰(対談連載)」で公開中です。  
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>